

小説同人誌評 38

今回は 『八月の群れ』 『あるかいど』 そして

細見和之

先日、全国同人雑誌協会の第二回大会が大坂で開催された。『樹林』が特別賞を授与されたこともあって、私は懇親会から参加した（昼間は別件が入っていて出席できなかった）。思いのほか盛会で、この同人誌評で取り上げてきた作者の何人かと顔を合わせることもできた。東京を中心とした華やか文学賞の世界とは異なった地道な文学の世界。ここに集っているひとたちが日本の文学の屋台骨を支えているのだとあらためて確認した。今回は前回よりもさらに多くの雑誌が届いている。取り上げたい作者と作品も多い。さて、どこまで紹介できるか。

まず紹介したいのは、『V I K I N G』第871号掲載の、内田謙二「離れないで」。四百字詰め換算で九七枚ほどの作品だが、以前に作者が連載で書き継いでいた長篇小説の、見事なエピソードとなっている。パリで悪戦苦闘を続けた日本人の男性がフランス人の女性と暮

らし、どのような結末を迎えるかが、当の日本人男性の手記と女性の日記、さらにはショートメールでのやり取りをつうじて、浮き彫りにされている。

惜しむらくは、冒頭の「私」が「日本人の女性」と最初は分かりにくい。同じく、物乞いをしているひとたちに気前よく施しをする年長の「男」も日本人であることが分からない。しかし、ここを超えると文体は明晰きわまりないものへと変貌を遂げ、読み手は作品世界にぐいぐい引き込まれてゆく。そして、ひとを愛するということ、ひとりの生涯に決定的にコミットすることの途方もない重さに、激しく打たれることになる。

『文宴』第139号掲載の、中田重顕「大正十一年生まれ」は四百字詰め換算で九二枚超（以下、「四百字詰め換算で」は略す）。

「私の母雪江」は大正十一年生まれ。その母親の同級生の男たちは、ことごとくアジア太平洋戦争で徴兵された世代に相当する。そのひとりひとりがどのように死んでいったか、あるいはかろうじて生き延びたかが、語りや遺書をつうじて克明に綴られている。私たちはそれらのひとびとの体験を黙殺することによって、いまにいたるまでの「戦後」の時代を生きてきたのではなかったか。ロシアによるウクライナ侵攻が続くなか、この作品に籠められたメッセージはかけがえのないものだ。

先に記した全国同人雑誌協会の第二回大会で大賞を授与されたのは『AMAZON』だった。同誌の第519号掲載の、髙恭嗣「佐渡と比丘尼（びくに）」は、八〇枚弱の力作。

江戸の初期、いわゆる絵解きを各地で行っていた熊野の比丘尼（尼僧）が佐渡島まで渡り、そこで遊郭を経営していたという、おそらくは史実に基づく物語。

絵解きとは、地獄や極楽の絵を示し、聴衆を仏教の世界へと導くものだったが、芸能としての意味合いもあって、のちに比丘尼たちは売春も行ったとされる。金の発掘で沸いていた佐渡島での遊郭の経営も、そういう問題に繋がっているのだろう。それにしても、若い尼僧が遊郭の経営に納得するものだろうか。当時の仏教と人間の関係を考えるうえで、これはかなり深刻なテーマだ。それに見合うだけの踏み込みが欲しい。後半、物語が途切れたように終わるのも残念だ。また、史実に基づくなら最低限の文献の指示もあつてしかるべきではないかと思う。

『あべの文学』第36号では、一四〇枚を超える、河内隆雨「学校の森」が充実している。小学校五年のクラスを担当している若い教員、沢村静香は、夏休みの直前に、自分の靴箱に「先生たすけて」と書かれた小さな紙切れを見つける。担当しているクラスやその周辺でいじめにあっている生徒からのSOSと

考えて、沢村は夏休みの間じゅう家庭訪問や生徒への聴き取りを続ける。一枚の小さな紙切れをめぐるミステリーは四年前に同じ小学校で起こっていたいじめへと繋がってゆく…。

実験的とも呼べるような複雑な物語を綴ることもある作者だが、この一篇はきびきびとした展開、明快な文章でとにかく読ませる。教師の沢村静香、沢村を支える学級委員の山根美咲など、キャラクターも立っていて、この一作で消えてゆくとしたら惜しいほどだ。

『八月の群れ』第76号には力作が並ぶ。

巻頭の牧美紀江「家族写真」は、四〇枚強のよくまとまった短篇。

「私」の仕事で、母親から「あの人が亡くなったの」とスマホに電話が入る。「あの人」とは「私」の父である。父親は一〇年ほど前に家を出たまま、別の女性と暮らしていたのだ。しかし籍はそのままであったため、母親が葬儀を行うことになる。遺影用の写真を探している、よりんなことが思い浮かぶ。母親は夫を恨むよりも懐かしむ気持ちの方が強いのだ。一

〇年間、父はもの思っ暮らしていたのか。同誌掲載の、三嶋幸子「孫のいる風景」も、

五〇枚弱の好短篇。タイトルを読むと正直、食指がそそられないが、たんに孫が可愛くてという話ではない。

夜遅く、「私」のもとに娘の美穂から電話があり、息子と娘を預かってほしいという。美

穂にはもうひとり圭という子どもがいるのだが、その子がネフローゼを発症してしまい、付き添い入院が必要なのだ。こうして「私」は小学校三年の相馬と三歳のこみみの面倒を夫ともに見るようになる。その様子がいささかコミカルに描かれている。

面白いのは、美穂の夫が一貫して悪役であること。名前までカタカナで「コウジ」としてのみ登場する。「私」はその名前さえ口にせず「アイツ」呼ばわり。しかし、美穂はコウジの悪口を絶えず口にしながらも別れる気配は微塵もない。相馬も父を嫌いだというのが、どこか「私」に甘えることとセットだ。つまり、コウジを悪役にすることで「私」のまわりの人々は繋がりが合っていて、美穂はもとより相馬もこみみさえも、そのことに自覚的であるようなのだ。読みようによっては、「私」だけがこの仕組まれた関係に気づかず、い

ように使われているのである。同誌掲載の、松良子「旧暦の女」も、タイトルからはテーマがちよっと分かりにくい六〇枚の短篇。

冒頭、照子（てるこ）と正臣（まさおみ）が大津市の唐橋のたもとで芭蕉の句を解釈する優雅な場面が始まる。照子と正臣はともに四五歳。元国文学教授の小夜子が主宰する「日本文化の会」で照子は学んでいて、正臣は小夜子の助手のような役割。照子は小夜子

の持ち家まで借りて暮らしている。つまり、照子は小夜子に将来を期待されているのだ。

ただし、その家で暮らすには、生活を旧暦に合わせるという条件があった。そのこと自体、照子はなんら苦にしないのだが、あるときから「日本文化の会」がたんに日本文化をだいたいにするだけでなく、戦前・戦中の軍国主義イデオロギーを崇拜する集まりであることに気づき、照子の心は会から一挙に離れてしまう。

この照子の離反の原因となった場面で具体的に描かれていないのが残念だが、旧暦の意味合いについても教えられることが多かった。同誌掲載の、大森康宏「片割れ」は、二つの流れの物語からなる百枚弱の作品。

ひとつは七五歳になった大江伸介のもとに、長いあいだ疎遠だった兄の清治が亡くなった知らせが届いて展開する物語。もうひとつは大江伸介が近所の居酒屋のマスター山野と「ママシ酒」の国際的な販売に向かう物語。この二つはある程度絡みながら展開するとは

いえ、あえて二つを組み合わせるためにはもうすこし膨らみがほしい気がする。

タイトルは明示的には、海外勤務も多かった伸介が妻の美咲に負担をかけたことを思っ

て互いを「片割れ同士」と考えたところに結びつけているが、優れた板前でありながら、博打癖が治まらず、三度の離婚を重ねた末に、ひとり暮らしのアパートで、動脈瘤破裂で亡

くなつた兄もまた、伸介の「片割れ」だろう。さらには、なにごとにもそつのない居酒屋の山野と不器用極まりなく生きた清治もまた、板前として「片割れ同士」かもしれない。「あるかいど」第74号にもよい作品が並んでいる。

同誌巻頭の、西田恵理子「鼻ぐり塚で待つ夏」は、思春期のデリケートな心の揺れを描いた四二枚ぐらゐの短篇。

主人公の兄玉史帆（こだましほ）は、母が死に、母代わりだった祖母まで亡くなつたあと、弟の有樹（ゆうき）の世話に追われている。父は長距離トラックの運転で家を空けていることが多いのだ。夏休みの勉強にも支障をきたしそうな史帆は、同級生の柏木率（かしわざりつ）とともに、よく勉強のできる大杉依央吏（いおり）に、早朝、「鼻ぐり」で夏休みの課題を教えってもらうことにする。また、率は史帆の家に泊まっていたりもするのだが、率は母親と二人暮らしで、その母親も帰宅しないことがあるようだ。お互い、分かっているようで分かっていないそれぞれの事情が微妙に揺れる。依央吏も「医学部を目指している」と母親から聞いたという率の言葉に、顔色を変えて走り去ってしまう…。

タイトルの「鼻ぐり塚」は、岡山市にある、牛の鼻輪を膨大に集めた塚。牛肉食という私たちの生活の背後にあるもの（牛の死）を如

実に感じさせるものだ。そこで夏休みに史帆、率、依央吏の三人が待ち合わせる。そこにはシンボリックな意味合いを読まずにいられない。

同誌掲載の、住田真理子「華山先生の画帖第一画 母の面影」は、江戸後期の画家にして文人、蘭学者であった渡辺華山の姿を、付き人のような位置にいた梧庵（ごあん）の視線で描いた歴史小説。

華山に命じられて、梧庵は華山とともに、藩の事情で二六歳で隠居させられている三宅友信の母、銀の現状を確認する旅に出る。銀は百姓出身の女中で、友信を出産後、三宅家を去らざるを得なかつたのだ。二人は新しい夫と暮らしている元氣そうな銀と無事出会う。梧庵は銀の肖像画を描くよう華山に勧めますが、嫌がる銀の態度を見て華山は写生することを控える。しかし、旅のあと華山は秘かに描いていた銀の肖像画を取り出す…。

とにかく、今回の作者は筆が達者。作者のいくつかの作品に接してきたが、これは新しい世界を切り拓くものだ。タイトルに「第一画」とあるのは、連作が意図されているのだろうか。つぎに梧庵はどんな華山の画を目にするのだろうか。

同誌掲載の、渡谷邦「水路」は、四〇枚ほどの見事な短篇。

ある日「わたし」に夫が、水路のあたりで

「わたし」に似た女を見かけたという。そこから不思議な物語がはじまる。近くの広場で華やかなバザーも行われるその水路には、まるでカロン（カロン）の渡し守のような老人がいて、水路に落ちた男の話を「わたし」に語り、気をつけろという。その似た女と「わたし」、夫の三人での共同生活がはじまり、似た女と「わたし」は入れ替わりそうな気配も漂わせて、やがて水路にひとりの女が落ちる…。

若い夫婦の危うい日常が、まるで優れた映画のようにたんと描かれている。完成度という点では、今回読んだなかで間違いなく一番だった。

ということで、今回、一冊の雑誌として充実にしていたものとして「八月の群れ」と「あるかいど」に指を屈したいところだが、「こみゆにいて」第17号も充実している。

同誌巻頭の、三沢充男「夕化粧」は、八三歳の主人公、三島左千夫が母親の実家を確かめる、三二枚ほどの短篇。

二時間半の旅ののち、左千夫がようやく探しあてた母の実家は立派な邸宅で、左千夫が記憶しているものとまるで異なっている。なんとといっても七〇年ぶりのことなのだ。左千夫の父は大きな百姓の長男で、母は婚家で辛い生活を強いられて、左千夫を産むまえに婚家を飛び出していた。それでもひそかに父と逢瀬を重ねていて、その結果、左千夫が生ま

れたのだった…。

「夕化粧」と呼ばれる花が父を迎える母の姿と重ねられていることも含め、全体がとても丁寧に書き込まれた好短編。

同誌掲載の、「乗合かおり」「無言」は、四五枚強の短編で、いわゆる限界集落の姿を描いている。

主人公の詮子は五〇歳前後、海外の大学を出て、東京で社会人として暮らしているが、ここ数年は故郷の山村に年に数回戻っている。東京で神職資格を得た詮子は、故郷の集落の神事を行ってきたのである。しかし、一六世帯を数えるのみの集落で祭を維持するのは年々困難になっている。父の兼昭は集落で信頼されていて、祭を続けるのが当然と思われている。そもそも詮子が神職資格を得たのは父を中心とした集落の希望によってだったのだ。ところが、兼昭と同年配で、自治会長をしている向かいの英介が集会ですべての祭・神事を廃止することを一方的に取り決める。そしてその夜、当の英介が山のなかで首吊り自殺を遂げる。死んでまで廃止したかったのか、廃止することを祖先に詫げるための死だったのか、英介の真意は不明である。

ともあれ、この作品は、私自身の地元をふくめて、いま日本の各地で生じている問題を印象深く照らし出している。

同誌掲載の、「春木静哉」「松杭」は、三〇枚

強の短編。

主人公の真一は六二歳前後。真一の東隣の「堀田さん宅」で解体工事が始まる。七、八月前日に、そこでひとりりで暮らしていた「ひろやさん」が亡くなったためである。その解体工事を担当しているのはトルコ出身で日本語を流暢に話すウナル。ウナルが使っている二人の若い従業員もトルコ人のようだ。解体現場からじつに一二〇本の松杭が引き抜かれる。田圃を宅地にするために九〇年前に埋め込まれていたものだった。元来、そのあたりは沼のような土地だったのだ。

宅地にするため、九〇年前沼地に埋め込まれていた松杭が、日本語を流暢に話すトルコ人の指揮のもと、見事に引き抜かれてゆく…。読みようによっては、これは現在の日本の一面を示した優れたアレゴリーである。

『文鳥』第5号は三六八頁の大冊になっている。同誌掲載の、「鳴海文成」「李（すもも）の木の下で」が四〇〇枚近くの長篇の形で一挙掲載されているからだ。

全体は三部構成になっている。第一部では「僕」の祖父、善助の死、とくにその遺言をめぐって、叔父、伯母などがぎすぎすとぶつかり合う場面が描かれる。第二部は、善助の主治医であった畑正利が善助がどういう人物であったかを、「僕」をはじめ遺族に語っているという設定部分。これがかなり長大である。

第一部で登場した謎めいた老婆と善助の関係もここで明かされることになる。そして、第三部はふたたび冒頭の場面にもどって短く締めくくられる。

さきに述べたとおり、第二部では善助の生涯が語られているのだが、そこには、彼の父母、血の繋がっていない弟の真行、その双子の姉ないし妹である弥生（これは娼妓名で、本名は三千江）、その双子の父である松浦幸吉、弥生に子種を宿して戦死してゆく陸軍中尉の大場輝正などが登場し、いささか錯綜した物語が展開される。松浦幸吉は土木建築業を彼の仕事としながら、その実、賭場を開いて博徒を集め、松錦楼という娼妓館まで経営しているという設定である。

その物語の時間の中心は、昭和一九年六月から戦後のはじめにかけてである。つまり、善助をめぐる物語の背景にはほとんど行き詰ってゆき、最終的には空襲にさらされる戦時下の生活があるのだ。そのなかで、善助は真行や弥生を守るため、まさしく獅子奮迅の闘いを繰り広げるのだった。

ここで興味深いのは、善助の生まれが大正一〇年の大晦日と設定されていることだ。今回二番目に紹介した『文宴』の中田重顕の作品では大正一一年生まれの世代の悲惨が追究されていた。善助もまたこの世代に属しているのだ。ただし、善助は生まれながら右足が

不自由で兵役には取られない設定である。しかし、彼と同世代の者たちは苛酷な戦場体験を強いられ、そのうち二人は帰還したのちに凄まじい報復を遂げるのだった。

物語の小道具の要に置かれている、李の木の下に埋められている猪口の話など、もうすこし明快に書いてほしかったと思うし、たくさん登場人物が行き交うと、絶えず読み返す必要が生じて、読者としては苦勞する。そのあたりもひと工夫が必要だろう。それでも、これだけの長篇を、当時の史実を踏まえて描ききった作者に拍手を送りたい。

「名古屋の文藝同人誌」と銘打った『R&W』第34号では、巻頭の森岡篤史「ものずき」という六〇枚強の短篇を印象深く読んだ。

享保一四年（一七二九年）に、交趾（こうし）国（現在のベトナム）から吉宗將軍に象が献上され、それが長崎から江戸へと旅してゆく。農民の娘であった九歳の「おたね」は、札幌（愛知県豊橋市）でその光景を目にする。その翌年、おたねは高田屋という旅籠に奉公に入るが、三年あまりをへたとき、高田屋のひとつ息子で、同年配の平次郎から「象の話が聞きたい」といわれる…。

今号の雑誌の表紙に宿場町をのしのしと歩く巨大な象の絵が掲載されているが、当時、外国からやって来た象という存在が人々に与えた衝撃を如実に感じさせる作品だった。

『西九州文学』は第50号記念特集が届いている。巻頭に『西九州文学』第50号までの歩み」が掲載されている。それによると、創刊は昭和三八年（一九六三年）一二月とかなり古いのだが、翌年四月に第2号を刊行したあと、二〇年におよぶ休刊状態になったのだった。そして、昭和五九年（一九八四年）一月に復刊・第3号が刊行され、以後、年に一冊ないし二冊の刊行をへて五〇号である。同誌掲載の、山本博幸「死者の都」は五二枚あまりの、記念特集にふさわしい力作。

冒頭、「私」は六年の刑期を終えて刑務所を出る。医院で看護師をしていて、有望な若い心臓外科医と結婚したが、娘を出産後、育児ノイローゼの状態に陥り、とうとう娘を殺害してしまったのだった。夫は事件のあと、連絡もなく失踪状態のままだが、「私」はアサギマダラという蝶を導きとして南の島に旅をす。アサギマダラは春には北に、秋には南に遠く旅をする蝶で、夫は学生時代からその蝶の探索に耽っていたのだ。そして、アサギマダラが多く棲息するその島にある、不思議な「死者の都」について、「私」に語っていたのである。

「私」はその島で、老女の康江と出会う。彼女は島のユタで、「死者の都」の由来について語り、実際にその「死者の都」の近くにまで案内してくれる。「私」はそこに自分の殺し

た娘が葬られていることを確信する…。遠い旅を続けるアサギマダラの群れと深い山のなかの「死者の都」の光景が濃密な文体でじっくりと描かれている。

『滋賀作家』は第150号記念特集号が届いている。こちらは創刊が一九七二年で、以来年三回の発行を続けて一五〇号である。

同誌では、巻頭に掲載されている、安部良典「紙風船」に惹かれた。三六枚あまりの短篇である。

冒頭、主人公の内田は古い師のもとを訪れる。高齢の内田（七〇代後半あたりか）は、悪い夢にうなされるような状態が続いているのだ。内田は古い師から先祖の供養をするようにいわれる。彼には、息子の光夫が五歳ぐらいのときに浮気を疑って妻を殴り、そのあと、父まで殴ってしまったという過去があった。妻は実家にもどりやがて離婚。光夫は中学を卒業すると都会に出て、音信は途絶えていた。気まずい生活が続くなかで、父は自死を遂げてしまう。父を死に至らしめたという思いが内田にはあるのだ。

久しぶりに父の墓を訪れた際、内田は若い住職と出合い、光夫の同級生だと知らされる。その住職とのかすかな交流によって、頑なに閉じこもっていた内田の心がすこしずつ外部に開かれてゆく。まるで脚のしびれが解れてゆくようなその感覚がよかった。